

九鬼周造記念講演会

「偶然に響く言葉の行方」コメント
「物語と共同社会」

浦井 聡

串田先生のご講演、大変興味深く拝聴しました。ことばを切り口として、哲学と文学を往還する九鬼哲学の特質を鮮やかに示していただいたように思います。蛇足ながら、先生のご講演のご趣旨を確認するところから私のコメントを始めさせていただきますだけばと思います。

私は先生のご講演の大枠を〈言葉を紹介した出会いとすれ違い〉という言葉で表現してみたいと思います。と言いますのは、ご講演を通して〈九鬼とハイデガー〉、〈人と言葉〉、〈言葉と言葉〉、〈共同社会〉の中の個々人、それぞれの出会いやすれ違いに言及されているように思ったからです。

まず一節では先生の主たるご専門であるハイデガーの対話篇『言葉についての対話より』に言及しながら、九鬼とハイデガーの〈出会い〉と〈すれ違い〉が表現されています。同著では、

しばしば問う人と日本人の間で「いき」が話題に上がります。これ自体は九鬼とハイデガー、そして「問う人」と「日本人」の〈出会い〉の産物だと言えます。ですが、先生が指摘するように、対話篇である同著の登場人物としての「日本人」にはハイデガーの思索が入り込んでいる。そのことによって、「日本人」や「九鬼周造」という同著の登場人物は西洋、とりわけドイツ語という「存在の家」への〈訪問客〉が本来持つはずの異他性が剥奪されてしまう。そこから、ハイデガーが思い浮かべる九鬼と、現実の九鬼の思索との〈すれ違い〉が生じてくる。

具体的に先生が指摘しておられるのは「いき」の捉え方です。現実の九鬼は『いき』の構造（一九三〇年）でハイデガーの解釈学的現象学を通路にして男女が出会う場面での美意識を論じたわけですが、『言葉についての対話より』における言及では全く別物になってしまっている。しかし一方で、ハイデガーが「ことば」の「こと」に「またとない瞬間」の意義を認める点に、九鬼の「偶然性」と深く響き合う点を指摘なさっています。これをハイデガー本人が知りえなかった九鬼との〈出会い〉と表現してもよいかもしれません。そして、この両者の接点をふまえて先生は次のような主題を取り出されます。すなわち、「いつか、またとない瞬間においてのみその優美を湛えて輝き現れ」という「こと」の魅了を捉え得た言葉は、その後どのようなようにして世に留まり、流れ出て広く人々に知られるよう

になるのか」と。

続く二節・三節では、この問いに対して九鬼の『文芸論』(一九四二年)所収の論考「日本詩の押韻」や実際の日本古典文学を手がかりにして考察を進めてゆかれます。二節では、九鬼のパレルゴン(題・詞書・左注)に対する見落とし——〈すれ違い〉——を指摘しながら、掛詞が単なる同音異義語の〈出会い〉であるだけでなく、その言葉の重なりの上に個人の生における偶然的出来事——「こと」——との〈出会い〉を見ておられます。すなわち、掛詞とは言葉と言葉の、人と出来事との〈出会い〉という「こと」の魅了を捉え得た言葉なのです。

三節では『万葉集』のなかの石川女郎と大伴田主という男女の〈出会い〉と〈すれ違い〉が示される一節が「こと」の魅了を捉え得た言葉のひとつであるとされます。そして、そのような「こと」の生起のなかで「自らの実存に固有な仕方である舞うこと」が「みやび」であるとされています。つまり、本節では九鬼が『いき』の構造の主題とした領域で「こと」を扱い、したがってこれを「みやび」や「いき」と接続しておられます。

ですが、このような男女の「こと」は——九鬼が『いき』の構造』の結論部で示したように——実際の体験と概念の間に大きな隔たりがあります。ただ「いき」の概念を把握するだけでは「いき」な生き方ができるわけではないというのが九鬼の考

えです。これをふまえて先生は両者の中間に「物語」が介在しているのではないかと問題提起されます。すなわち、「こと」の概念と実存とが接続される際には物語が媒介とされているのではないかと、ということでした。

結びの四節では、個人が経験する全領域におけるさまざまな「こと」の生起の記録が、現代においていかなる仕方・いかなる表現・いかなる領域でおこなわれるべきか、そういった媒体がなければ共同存在の新たな可能性を切り拓くことは不可能なのではないか、そしてこのような状況はいかにして乗り越えることができるのかという問いを投げかけられて講演を閉じられました。

ここから先生のご講演に対してコメントさせていただきます。私が主な専門としておりますのは、九鬼の博論の審査員を務め、先生のご講演のなかでも名前が挙がっていた田辺元です。田辺はしばしば「全身哲学者」と表現されるように「みやび」と最も縁遠い生涯を送った哲学者ですが、意外にもアララギ派の詩人であり、多くの詩歌を残しております。そういった切り口から両者を結びつけることで九鬼と田辺の新たな接点を模索することも可能かもしれませんが、本コメントでは先生が三節で提示された〈概念・物語・実存〉という図式および四節でご提示なさった問いに対し、田辺の「種の論理」を手がかりにして改

めて問いを投げかけさせていただきます。

まずは、先生が三節でお示しになられた〈概念・物語・実存〉という、物語を中立ちとする概念と実存の関係を取り上げたいと思います。物語は必ず言語によって記録されるものです。そして、故事成語やことわざが他の言語に翻訳されるとき、直訳だけでは意味を十分に伝えることができないという事象が示しているように、実際の物語は必ず〈普遍〉や〈個別〉ではなく〈特殊〉になります。むしろ、〈概念・物語・実存〉がまさに〈普遍・特殊・個別〉という構造になっているように思われます。(ここで、〈普遍・特殊・個別〉というのは、たとえば、「花」という概念(普遍)、砂漠の花・日本の桜といったさまざまな環境下での花(特殊)、「私」が魅了された「この花」(個別)というように当てはめることができます。)ある物語は必ず、いつかの・どこかの物語として時間的にも空間的にも限定されたものとなるからです。言い換えれば、物語は必ずある特殊社会(共同体・共同存在)に付属のものとなっています。

さて、この〈普遍・特殊・個別〉という図式で共同体と個人の構造や両者の影響関係を説明しようとしたのが、田辺元が一九三四年から一九四一年にかけて世に問うた社会存在論「種の論理」です。田辺は〈普遍・特殊・個別〉に対して〈人類・共同体・個人〉(田辺の用語で言えば〈類・種・個〉)という分類を当てはめました。この分類をもって田辺が模索したのは、あ

えて一言で言えば「なぜ共同体は私に対して強制力を持っているのか、そしてなぜ私はそれに従わざるを得ないのか」です。そして、田辺は共同体の強制力の根源は、共同体の奥底にある歴史と共に動的に発展していく原理(種的基本体)であると考えました。別の角度から言えば、現実存在する個々の共同体は、それぞれ固有の原理をその根底に持ち、その原理に固有の仕方でもコントロールされている。ここでの共同体の具体例は、地縁共同体・血縁共同体です。したがって、いわゆる県民性とか国民性と呼ばれるものは、個々の共同体が個々人をコントロールしていることの特徴であるように思われます。

もちろん、こういった地縁・血縁共同体をベースとする田辺の社会思想は一九三〇年代だから出来た思想であって、都市化・核家族化が問題となって久しいこの令和の現在、とりわけ都市で生活する者には無関係と思われるかもしれませんが——無論、実際にはそうではないのですが——。ただし、「情報システムが高度に発達した現在」(九八頁)では、共同体や各共同体の原理(種的基本体)ということも地縁・血縁からさらに拡張されて考えられねばならないのは確かです(1)。ここ一年余りのコロナ禍でさらに顕著になったように——私がパソコンの画面に向かってこのコメントを読んでいる今現在も含めて——地縁も血縁も無関係だけでなく、同じ空間に存在しない大勢の人とも思考を共有できる／せざるを得ない状況になって参りま

した。そして、そこでは物語も大地から遊離してかつて私たちが物語と呼んでいたものから変質してしまっているのではないかと思います。

と言いますのは、大雑把に言えば、同じ空間には存在していないものの確かに生きている誰かと言葉を介して共感を得ることが可能となっているという現実があり、物語はその共感、そしてこれに基づく共同存在形成の土壌となっているのではないかとということです。確かに、私たちは現在でも遙か昔と変わることなくフィクション——一種の作り物語——の喜劇や悲劇に一喜一憂しています。ですが、かつての血縁や地縁、あるいは神話のように人々を結束させる契機は、そういったフィクションではなく共通の理念と呼ばれるべきようなものであるように思われます。つまり、ヴァーチャルな共同体が成立するとき、そこにはすべての成員が賛同すべき理念が「物語」としてその共同体の基礎となっている（先に物語を特殊に当てはめた所以です）。別の角度から言えば、リアルな共同体が血縁（家族・親戚）や地縁（同じ土地に住んでいる者・同じ学校に通う者・同じ職場で働く者など）を基礎としていたのに対して、ヴァーチャルな共同体は物語の理念を基礎としている。そして、情報システムの発達と共に単なる思いつきや愚痴までもがオンライン上に留まることになり、以前よりも時間・空間を問わず瞬時にそして言葉が通じる限りは誰とでもつながることが出来るよ

うに変わったことで、そのような共同体の形成が加速してきているのではないかと思います。このことによって、以前よりも遙かに多重で複雑な共同体の乱立が起こっているのが（ヘリアル・ヴァーチャル）の二重生活を送る私たちの現実なのではないかと思えます。

もしそうであるとするならば、確かにその場合の「物語」は地縁や血縁とは別の形での共同存在の実現を可能にしていると言えます。そこに、以前は起こりえなかった共同存在の実現可能性を見出すことができるでしょう。ですが、その一方で共同存在の実現を困難にしている、あるいは局限している一面を持ち合わせているのではないかと思えます。例えば、「物語」に従わない者や別の「物語」を遵奉する者との間ではどうでしょうか。共同存在が成立しないだけでなく、時に争いさえ引き起こすのではないのでしょうか。そうであれば、その「物語」はすでに「こと」の魅了を捉え得た言葉「でないだけでなく、むしろ一種の暴力装置へと墮し、田辺が種的基本体と呼んだものに非常に近くなっているように思われます。ここに、言葉を記録・伝達する媒体の変化による物語の変質を指摘できるのではないのでしょうか。

さて、そういった争いのなかで生じているのは、九鬼が「右がある一定の場所へ落ち」⁽²⁾ることが示すような「機械観」⁽³⁾と表現した「因果的必然」に近いのではないかと思います。つ

まり、手持ちの「物語」から現前の現実が演繹できるか否かというようなことが判断基準となっているのではないかとこのことです。田辺はそういった状態にあることを〈個人の社会への埋没〉と表現しました。と言うと非常に大げさになりますが、これは具体的には、いわゆる慣習やしきたりに個々人の判断がコントロールされている状態が優位にあることを意味しています。正しい作法みたいなものは生活の至るところにあって、それを守っている人は守っていない人に対して何らかの違和感を抱かざるをえません。卑近な例を挙げてみますと、日本の家庭では屋内は土足禁止のところが多々ありますが、そこに土足で入って来られると多くの人は拒否反応を示すと思います（私自身もそうです）。そこに、慣習からの判断の演繹があり、それは自由な判断というよりも機械的な「因果的必然」に近いのではないかと思います。

もちろん、だからといって「明日から家で土足で生活しよう」と言いたいわけではありません（それも慣習への反抗として慣習にコントロールされていることに他なりません）。この判断の傾向が著しく問題になるのは、〈こと〉の生起の場面ではないかと思えます。と言いますのは、判断の大部分が慣習や「物語」からの演繹となった時、視野の一部が塞がれてしまっ、本来ならば出会ってもおかしくなかったはずの自己と何か／誰かがすれ違うことになってしまうということです。九鬼が「偶

然性の感情当備は驚異の情緒である」⁽⁴⁾と言ったように、偶然の出会い、〈こと〉の生起による感動には自分の思考の埒外における何かとの邂逅が不可欠であるはずだからです。

そうであれば、情報システムの発達によって〈出会い〉ではなく〈すれ違い〉が、共同存在ではなく争いが起こってしまうようになってしまっているのではないのでしょうか。つまり、共同存在の可能性ではなく、争いの可能性を広げてしまった面があるのではないのでしょうか。

そのような現代において、物語はどのような社会的役割を担うことができるのでしょうか。あるいは、共同存在を作り出すに足る媒体たり得るのはどのようなものなのでしょうか。そして、「こと」の魅了を捉え得た言葉はどのように表現されるべきでしょうか。このように、別の経路で私も串田先生が提出された問いを提示させていただきます。

註

(1) この点に関しては、以下の拙稿で田辺の類・種・個の構造を踏まえて考察した。浦井聡「田辺元の宗教哲学における実存協同をめぐる――「種の論理」から「愛の論理」へ――」、『宗教学研究室紀要』、第一五号、二〇一八年。

(2) 『九鬼周造全集』第二巻、岩波書店、一九八〇年、九一頁。

(3) 上掲書、六六頁。

(4) 上掲書、二一五頁。

第2回九鬼周造記念講演会

シンポジウム「偶然に響く言葉の行方」

二〇二一年三月四日

於・Zoomによるオンライン開催

○司会 時間になりましたので、第2回の九鬼周造記念講演会を、開始したいと存じます。司会の甲南大学文学部の川口と申します。今年度は、串田純一先生にお越しいただきまして、ご講演をいただけることになりました。そしてコメントーターには浦井聡先生がお越しくださっています。

皆さまご存じのように、実際に人があつまって、講演会という形でつどい、そして質疑応答のやりとりをするというコミュニケーションをおこなうことは難しい年度に、なりまして。この会も、夏に実施する予定だったものが長らく延期いたしました。なんとか会を実施できないかと模索する途中でも再びいわゆる緊急事態宣言が出るなど、困難が続いております。最終的に、このようなオンラインの形で、今日、無

事実施をできる運びとなりました。

オンラインであることにはメリットもあり、各地の様々なところからご来聴いただいておりますようで、その面ではよかったかなと存じます。今日はご講演、そしてコメントーターからのコメントの後に、フロアの皆さまからご質問をいただきまして、登壇者と質疑応答する時間を設けておりますので、ぜひ、様々なご発言を頂戴できましたら幸いに存じます。

それではさっそく、串田先生のご講演からプログラムを始めてまいります。タイトルは「偶然に響く言葉の行方——九鬼周造から出発して」です。串田先生はご著書はもろろんのこと、色々な媒体にてご論文、ご文章を書いておられます有名な方ですので、あらためて私からご紹介する必要があります。くないほどであります。ご講演のファイル（来聴者に配布）の最初にご自身の簡単なご紹介を記しておられますので、こちらも皆さまご参照くださればと存じます。

そうしましたら、串田先生から一時間ほどのご講演をいただきます。串田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

【串田先生の講演内容は八七ページに掲載】